【資　料】

血液透析と就労の両立における諸問題に関する文献検討

Literature Review on Problems in Balancing Hemodialysis and Employment

山元万里子[1)]　青木久恵[2)]

1)福岡看護大学　看護学部、2)福岡看護大学　看護学部　看護学科　基礎・基礎看護部門

抄　　録

本研究の目的は、日本における血液透析患者の透析と就労の両立における諸問題について明らかにすることである。医学中央雑誌 Web 版にて、「原著論文」に限定した上で、「血液透析」and「就労」、「血液透析」and「仕事」で検索を行い、目的に合う 9 件を対象に、血液透析患者の透析と就労の両立における諸問題について分析を行った。その結果、血液透析患者の透析と就労の両立における諸問題は、【就労継続の困難感】【諦観】【疲労蓄積と自己管理行動の低下】の 3 つに集約された。透析患者が抱く【就労継続の困難感】は、透析時間による時間的拘束が就労選択の幅や業務に支障を及ぼしている結果であり、夜間透析やオーバーナイト透析の普及が求められる。職場への気兼ねについては、心理状態を理解し、安らげる透析治療環境の提供と、安心して悩みを打ち明けられる存在に看護師がなれるような取り組みが必要である。また、血液透析患者は就労に関する【諦観】を抱いており、看護師は患者の社会的背景を知り、医療ソーシャルワーカーなどの他職種と連携し、患者の就労支援と不安の軽減に努めることが必要である。【疲労蓄積と自己管理行動の低下】は、疲労感の軽減を図るために、栄養・体重管理の自己管理行動を促進するための支援が必要である。

キーワード：血液透析，就労，仕事，文献研究

緒　　言

わが国の透析療法を受ける患者数は、年々増加傾向であったが、その伸びは鈍化しており、透析導入の最大原因である糖尿病性腎症の割合も全体の 39.1%と横ばいで推移している[1)]。このことは、腎疾患対策の着実な成果の一因であると考える。しかし、現在もなお 344,640 人の患者が透析療法を受けている現状[1)]がある。

5 年ごとに発刊される「2016 年度血液透析患者実態調査報告書」[2)]によると、18 歳から 98 歳までの血液透析患者の未就労者は、調査対象の 12,367 人中 66.3%を占めていた。この未就労者の 40.4%は、就労の意向はあるものの、仕事に就けないでいる者であった。就労している血液透析患者の収入は、平成 28 年(2016 年)の民間の平均給与所得 422 万円[3)]に対し、300 万円を超える割合は、男性が 32.9%、女性が 9.4%であり、200 万以下の世帯も 22.1%[2)]とかなり所得が低い傾向にある。これらのことから、血液透析をしながら就労する困難さがあることが推察される。

透析療法の目的は、単に生命を維持するのみでなく、患者の quality of life(以下 QOL)の向上及び、充実した社会復帰や家庭生活を追求することにある。また、職業を持つことは、身体的・精神的に QOL を向上させる大きな要因になることが明らかになっており[4)]、就労することの意義は大変大きいと考える。したがって、血液透析患者の透析と就労の両立に関する諸問題を検討し、治療と社会生活との両立ができるような支援について検討する必要があると考える。

そこで本研究の目的は、血液透析患者が血液透析と就労の両立をする上でどのような諸問題があるのかについて明らかにすることを目的とする。

研究方法

1.対象となる文献の抽出

医学中央雑誌 Web 版で 2021 年 9 月に、2011～2021 年の範囲で検索を行った。文献の種類は「原著論文」とし、Keyword は「血液透析」and「就労」、「血液透析」and「仕事」で検索を行った結果、141 件が抽出された。これらの文献から本研究の目的に沿わないものを除外した。除外した文献は、看護師に関するもの 24 件、医師の症例研究 21 件、多職種 12 件、就労していないもの 10 件、腹膜透析 13 件、在宅血液透析 2 件、施設に関するもの 4 件、看護ケア(穿刺)2 件、薬剤投与に関するもの 2 件、家族支援 8 件、家族介護 7 件、自己管理(運動、食事、服薬、体重管理)8 件、高齢者 7 件、在宅支援 3 件、災害 2 件、生きがい・幸福度 2 件、腎移植 1 件及び、2 つの検索 Keyword 検索で重複した文献である。その結果、本研究の目的に合う計 9 件を分析対象とした。

2.分析方法

1)対象論文のリスト作成と問題のカテゴリー化

9 件の文献について、「著者」「タイトル」「掲載年」「対象者」「デザイン」「血液透析と就労の両立に関する問題点」についてまとめ、リストを作成した。血液透析と就労の両立における諸問題については、意味内容の類似性からカテゴリー化による集約を行った。

2)倫理的配慮

論文を正確に読み取り、著作権を侵害することがないよう留意した。

結　　果

分析対象とした 9 件の血液透析患者の血液透析と就労における諸問題に関する研究概要を表 1 及び、図 1 に示した。

1.掲載年別論文数、研究デザイン

分析対象となった論文 9 件の掲載年は、2013 年 3 件[5)-7)]、2014 年 1 件[8)]、2015 年 1 件[9)]、2016 年 2 件[10),11)]、2018 年 2 件[12),13)] であった。

研究デザインは、質的研究 8 件(88.9%)、量的研究 1 件(11.1%)であった。

2.血液透析患者の血液透析と就労の両立における諸問題

1)就労継続の困難感

血液透析と就労の両立における諸問題として、血液透析 1 回に 4～5 時間を要する時間的拘束[5),10),13)] や、シャント肢によって手が上手く使えないことによる制限[13)] があるため、就労選択の幅にも制限があり業務にも影響が生じていた。そのため、透析によって生じた残務を残業や休日出勤にて対応しなければならない[6),7)]状況も報告されていた。一方、透析治療に対する職場の理解は難しく、業務に応じて透析日の変更をしなければならない現状もみられた[12)]。このような現状の中で、患者の多くが、職場に対しての申し訳なさといった気兼ねを感じていた[7),10),12)]。また、失業への不安[11)]や、資格を持たない女性が社員になる苦労もみられた[5)]。これら諸事情は、血液透析患者の就労を継続する上での困難感であるため、「就労継続の困難感」とカテゴリー化を行った。

2)諦観

血液透析と就労の両立における諸問題として、血液透析による勤務調整の必要性から昇進への諦め[7),9),11)]や、仕事が十分に出来なくなったことで仕事に対する責任が果たせない思い[11)]、自分の可能性への諦め[11)] がみられた。これらの感情は、仕事に対する諦めの感情であるため、「諦観」とカテゴリー化を行った。

3)疲労蓄積と自己管理行動の低下

血液透析と就労の両立における諸問題として、疲労蓄積度の総合評価では、仕事による負担は事務関係や自営業、営業、設備関係より農業関係、管理職で高かった[8)]。また、透析期間による変化はあるものの、就労との両立によって健康状態に関する自己管理行動の低下が指

表１　血液透析と就労の両立に関する問題点

著者	タイトル	掲載年	対象者	デザイン	血液透析と就労の両立に関する問題点
二本柳玲子[5]	血液透析を続けながら生活する女性の思い	2013	患者10名	質的研究	透析時間を確保するために時間の融通がきく仕事しか選択できなかったという思いや、資格を持たない女性が病気をもった時の就労の苦労と社会の厳しさを感じていた。
西山マスミら[6]	血液透析を受けながら仕事を継続すると自己決定した心理的要因	2013	患者10名	質的研究	血液透析のない日に残業したり休日出勤をするなど、特別扱いされたくない、負けたくない気持ちで仕事に臨み無理していることが考えられる。
西山マスミら[7]	血液透析を受けながら仕事を継続する上での心理的負担	2013	患者10名	質的研究	自分の仕事の責任を果たそうと、透析のない日に残業している。また、職場の人たちに迷惑をかけないように、できるだけ皆と同じように仕事をしようと気兼ねしながら働いている。昇進への諦めが見られた。
大山奈緒美[8]	夜間透析患者の生活状況に関する実態調査ー就労と治療の両立に向けた支援を目指してー	2014	患者13名	量的研究	疲労蓄積度は、管理職と農業関係で仕事負担が高い傾向を示した。自己管理行動は、透析歴4年以上が水分制限、食事療法、服薬管理で、または59歳以下が水分制限、食事療法、服薬管理、体重測定等すべての項目で取れていなかった。
栗柄加代子ら[9]	透析療法をうけながら仕事を継続する壮年期男性の思いー夜間透析患者の語りからー	2015	患者2名	質的研究	職場での立場の変化に伴い、願望や要求がありながらも諦めざるを得ない状況がある。
髙山陽子ら[10]	透析を続けている壮年期の患者と配偶者の思い	2016	患者・配偶者3組	質的研究	仕事は体調をみながら自分のペースで調整している一方で、周囲に対する気兼ねと時間的拘束を感じている。
西山マスミら[11]	血液透析を受けながら仕事を継続していく上で感じた困難に対する対処	2016	患者10名	質的研究	昇進への諦めや、仕事内容の制限や仕事が十分に出来なくなったことで仕事で責任が果たせない思いや自分の可能性への諦めが見られた。また、失業への不安を抱えていた。
石井俊行[12]	透析患者の就労を支える構成要素の分析ー透析施設側に焦点を当てたインタビューの分析ー	2018	患者7名	質的研究	多忙な時期は、残業により透析予定日の変更をクリニックへ依頼しており、透析治療に対しての職場の理解が難しい現状がある。
関光[13]	家庭での支援が得にくい透析患者の日常生活における自己管理の問題点を明らかにする	2018	患者2名	質的研究	同僚の配慮を得て仕事が行えているが、会社にこれ以上迷惑かけられないと、気兼ねを感じている。また、左手のシャント肢の制限によるものと、透析時間の拘束によって仕事への影響がある。

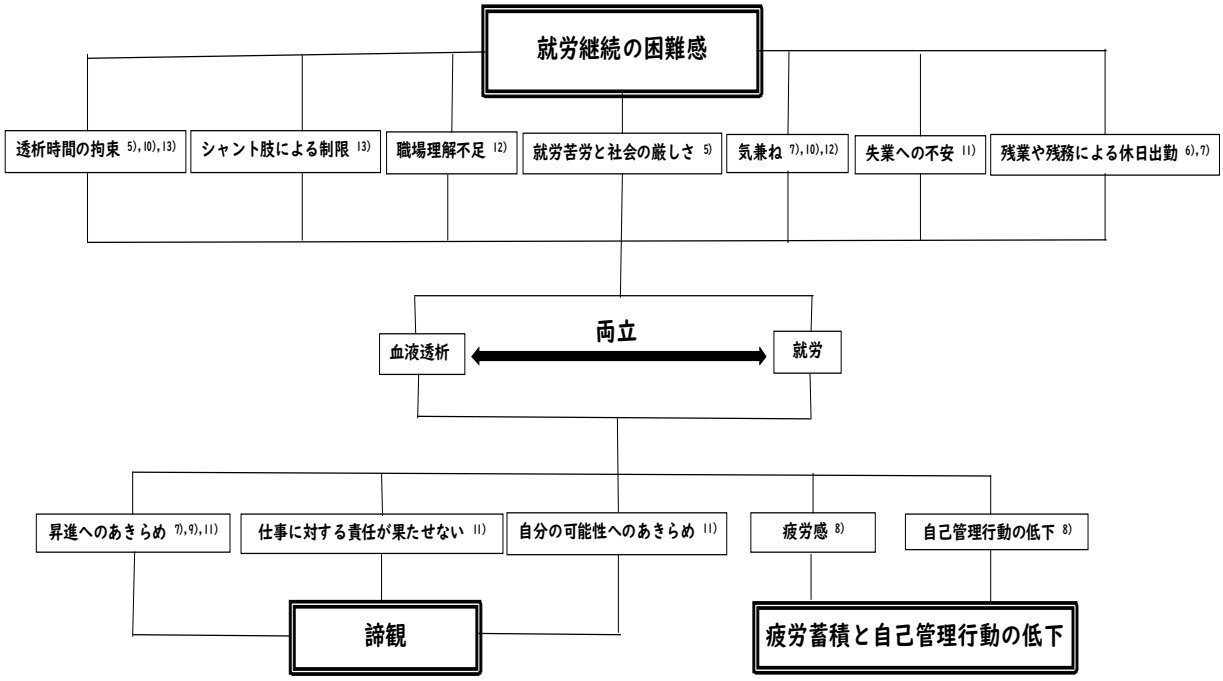

図１　血液透析と就労の両立における諸問題

摘されていた[8]。これら諸問題は、患者の身体的疲労と自己管理に関するものであるため、「疲労蓄積と自己管理行動の低下」とカテゴリー化を行った。

考　　察

1.就労継続の困難感

透析患者は、透析治療のため週 2～3 回、1 回につき 4～5 時間の時間的拘束を受けざるを得ない。「就労継続の困難感」を抱く要因としては、透析治療の日程調整や就業時間の短縮を日常的に行わなければならないため、就労選択の幅や普段の業務への影響を受けていることが推察できる。菊池ら[14]は、患者が full time の仕事を可能にするためには、透析治療のための拘束時間の短縮や透析開始時間を患者の就業時間後とするような配慮が必要と述べている。拘束時間の短縮については、現在ではフレックスタイム制度や在宅勤務等を採用している職場はみられるものの、血液透析患者に対して、どの程度普及し支援されているかは明らかにされていない。そのため、職場環境については、今後も検討を重ねていく必要があると考える。

透析開始時間については、全国腎臓病協議会らによる血液透析患者 12,367 名を対象とした調査[2]によると、就労者の 44.5%が午後 5 時以降の透析の開始もしくは、午後 9 時以降の透析を終了する夜間透析を利用していた。この結果から、就労患者以外にも夜間透析の需要があることが推察されるが、就労患者が一般的な就業時間に支障がない生活を送るためには、夜間の時間帯での透析が求められる。夜間透析は、2015 年の 33,370 人[15]であったが、2019 年は 32,037 人[1]で、この 5 年間は 31,000～33,000 人の間で推移しており、大幅な増加はみられていない。しかし、社会復帰を目的とした患者が夜間に開始して朝方に終了する「オーバーナイト透析」が 2005 年から始まり[16]、普及してきている。オーバーナイト透析の利点は、一般的な就業時間帯に影響しないだけでなく、透析時間が 7～8 時間と長時間かけて透析を実施する。一般的な透析時間が 4～5 時間であるため、約 2 倍の時間をかけている。このように時間をかける透析は、より緩徐にかつ、より多くの尿毒素や余分な水分除去ができることである。そのため、合併症の減少や貧血の改善、栄養状態の改善などが期待されており、より一層 QOL 向上や生命予後に貢献する治療であると考えられている。

これらのことから、透析治療も患者のライフスタイルに応じた選択の幅が広がるよう、夜間透析やオーバーナイト透析の普及が求められる。特に、オーバーナイト透析は治療効果が高く、かつ就労者にとって勤務時間を調整する必要がないため、就労継続困難感のうち時間に関する問題軽減に貢献するのではないかと考える。

残業や休日出勤、透析予定日の変更は、患者自身が職場に迷惑をかけないための対応であると考える。また、西山ら[7]は自分の仕事が十分にできない申し訳なさや気兼ねといった心理的な負担があると述べている。そのような患者の背景にある勤務状況や心理状態を看護師は理解し、患者が安心して悩みを打ち明けられる存在になれるように努め、患者に適した透析治療環境の提供に向けた支援ができることが求められる。

2.諦観

仕事に対する願望や昇進への思いがありながらも諦めざるを得ない状況の背景には、透析治療という生命維持を優先せざるを得ない治療が関わっており、患者は時間的拘束や、シャント肢による身体的制限によって業務に制限が生じている。稲生ら[17]は、透析治療を受けていては「出張や会議に出られない」「昇格できない」という血液透析患者の思いを報告している。また、透析治療による仕事時間や内容への影響から失業や再就職の不安をより強く抱いていることを報告し、本研究の結果と一致している。また、原ら[18]は、透析患者の精神的ストレッサーには、「将来への不安」が最も高く、続いて「治療時間の長さ」「身体的活動の制限」がみられていたことを述べており、就労していなくても透析を余儀なくされている患者の将来への不安や身体的苦痛があることが示されている。そのため、就労可能な患者については、産業医や保健師と

連携しながら就労の継続に向けた支援が必要であると考える。しかしながら、継続困難なケースも存在すると考えられるため、患者の社会的背景を知り、医療ソーシャルワーカーなどの他職種と連携し、患者の就労支援と不安の軽減に努めることが必要である。

一方、就労の継続には、職場の理解が必須であるため、透析治療に対して正しい知識の提供ができるような啓蒙活動も重要と考える。

3.疲労蓄積と自己管理行動の低下

夜間透析患者の就労者の中で、農業関係や管理職に疲労蓄積度が高い理由について、時間外労働や不規則な勤務、出張に伴う負担、身体的・精神的負担が大きいことが考えられると大山は述べている[8]。また、透析による疲労感について中原ら[19]は、透析日の疲労は非透析日よりも有意に高く、透析間体重増加が多く、血清 Alb 値が低いと疲労感が強い結果を示している。つまり、いかに透析間体重増加と低 Alb 血症を予防できるかが透析による疲労感を軽減することにつながると言える。そのためには、栄養・体重管理の自己管理行動を促進するための支援が必要である。

大山[8]は、透析患者の自己管理行動の継続について、透析歴 4 年以上では水分制限や体重測定、食事や服薬管理が困難な状況になっていることを報告している。自己管理行動の継続が困難な理由として、春木[20]は、3 年透析すれば一人前という言葉通り、患者はすっかり透析生活に慣れ、自信もつき、社会的にも活動できてくるため、種々の制限について、ルーズになりがちになると述べている。このように、導入期を過ぎた維持期の患者に対して看護師は、個々の患者の臨床所見や服薬状況を確認しながら、自己管理行動の継続に向けた個別指導を行う必要がある。

透析患者にとって職業を持つことは、安定的な経済状態を保障することにつながり、QOL を向上させる大きな要因である。また、仕事の有無が直接生きがい感に影響を及ぼし、無職では生きがい感が低いことが明らかとなっている[21]。そのため、血液透析患者が就労することの意義は大きいと考える。

本研究では、血液透析患者が透析と就労の両立に関する諸問題について分析を行ったが、これらの諸問題が解決に向かうためには、職場環境、治療環境、医療福祉関係者による支援、システム作りが課題であるといえる。

結　　語

1. 血液透析患者の血液透析と就労の両立に関する原著論文は、2011 年から 2021 年までで 9 件が抽出された。
2. 血液透析患者の血液透析と就労の両立における諸問題は、【就労継続の困難感】【諦観】【疲労蓄積と自己管理行動の低下】の 3 つに集約された。

本研究において申告すべき利益相反事項はない。

引用文献

1) 新田孝作, 政金生人, 花房規男　他：わが国の慢性透析療法の現況．透析会誌, 53(12), 579-632,2020
2) 全国腎臓病協議会, 日本透析医会, 統計研究会の共同調査：2016 年度　血液透析患者実態調査報告書, https://www.zjk.or.jp/material-book/download/06_5aa613509e6f8/upload/20180312-152412-5162.pdf(2021.11.20)
3) 国税庁長官官房企画課：平成 28 年分　民間給与実態統計調査－調査結果報告－, https://www.nta.go.jp/publication/statistics/kokuzeicho/minkan2016/pdf/000.pdf(2021.11.20)
4) 岩永喜久子, 宮崎正典：透析患者の日常生活における健康関連 QOL 評価．日本看護学会論文集 看護総合, 37, 135-137, 2006
5) 二本柳玲子：血液透析を続けながら生活する女性の思い．北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9(1), 17-25, 2013
6) 西山マスミ, 高橋永子：血液透析を受けながら仕事を継続すると自己決定した心理的

要因．キャリアと看護研究, 3(1), 51-60, 2013
7) 西山マスミ，高橋永子：血液透析を受けながら仕事を継続する上での心理的負担．看護・保健科学研究会誌，14(1)，48-57, 2013
8) 大山奈緒美：夜間透析患者の生活状況に関する実態調査－就労と治療の両立に向けた支援を目指して－．日本職業・災害医学会会誌, 62(6), 393-398, 2014
9) 栗柄加代子, 内田史江：透析療法をうけながら仕事を継続する壮年期男性の思い－夜間透析患者の語りから－．キャリアと看護研究, 5(1), 35-41, 2015
10) 髙山陽子, 渡邉朋子, 高梨春子：透析を続けている壮年期の患者と配偶者の思い．長野県看護研究学会論文集, 37, 16-18, 2016
11) 西山マスミ，高橋永子：血液透析を受けながら仕事を継続していく上で感じた困難に対する対処．キャリアと看護研究, 6(1), 88-98, 2016
12) 石井俊行：透析患者の就労を支える構成要素の分析　透析施設側に焦点を当てたインタビューの分析．インターナショナル Nursing Care Research, 17(1), 65-72, 2018
13) 関光：家庭での支援が得にくい透析患者の日常生活における自己管理の問題点を明らかにする．長野県透析研究会誌, 41(1), 94-96, 2018
14) 菊池博, 東條静夫：社会復帰と職場環境．日本臨牀, 50(増刊 1), 1028-1033, 1992
15) 政金生人, 谷口正智, 中井滋 他：わが国の慢性透析療法の現況.透析会誌,50(1),1-62, 2017
16) 前田利朗：長時間透析－オーバーナイト透析：歴史から学ぶこと－．日本透析医学雑誌, 35(2), 379-386, 2020
17) 稲生涼子, 中﨑陽子, 長﨑志帆：透析患者の社会復帰の現状．共済医報, 52(1), 41-45, 2003
18) 原明子, 林優子：血液透析患者のストレッサーと対処．岡山大学医学部保健学科紀要, 15, 15-21, 2004
19) 中原宣子, 西口和美, 泉暢英　他：外来血液透析患者の疲労感と種々の要因．日本透析医学会雑誌, 52(8), 477-483, 2019
20) 春木繁一：透析患者の心とケアーサイコネフロロジーの経験から〈正編〉, 11, メディカ出版, 大阪．1-287, 1999
21) 瀧川薫：維持透析患者への健康教育－自己管理と生きがい感の関連に着目して－．日本健康医学会雑誌, 22(2), 98-106, 2013

Literature Review on Problems in Balancing Hemodialysis and Employment

Mariko Yamamoto[1)], Hisae Aoki[2)]

1)Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing, Department of Nursing

2) Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing, Department of Nursing, Division of Basic Medical Science and Fundamental Nursing

Key Words: Hemodialysis, Employment, Work, Literature study

The purpose of this study was to clarify problems in balancing hemodialysis and employment among hemodialysis patients in Japan. We conducted a search for “hemodialysis” and “employment”, and “hemodialysis” and “work” in original articles in Japan Medical Abstracts Society, and analyzed various problems in balancing between dialysis and employment among hemodialysis patients for nine cases that fit the purpose of this research. Then, the problems of hemodialysis patients in balancing dialysis and employment were summarized into three categories: a sense of difficulty in continuing to work, the feeling of resignation, and fatigue accumulation and decline in self-management behavior. “A sense of difficulty in continuing to work” felt by hemodialysis patients is caused by the time constraints arising from dialysis interfere with the range of work options and work duties. It is therefore necessary to promote night dialysis and overnight dialysis. It is also necessary to provide a comfortable dialysis treatment environment by understanding their psychological state and to work to make them feel safe to confide their worries to nurses in order to reduce their concerns about the workplace. In addition, hemodialysis patients have “the feeling of resignation” on employment, therefore, it is necessary for nurses to know their social background and support their employment and reduce their anxiety by working with other professionals such as medical social workers. On “fatigue accumulation and decline in self-management behavior” it is necessary to support the promotion of their self-management behavior on nutrition and weight management in order to reduce a sense of fatigue.